



増田逸子さん

富士通フロンテック・ノースアメリカ(FFNA)社長、増田義彦さんの妻。結婚30年目。現在19歳、17歳、15歳の3人の子供の母親で専業主婦だが、日本ではコピーライターとして活躍した。2004年、日本の富士通本部で勤務していた義彦さんに富士通コンピュータプロダクツ・オブ・アメリカ(FCPA)社長就任の辞令が下り、それを機に家族でシリコンバレーに渡る。09年に義彦さんの現職異動に伴い、オレンジカウンティに引っ越し、現在に至る。カナダでの駐在経験もある。

エゴと愛情の境を知ること 家族にハーモニーが生まれる

夫のため、子供のためではなく
何事も自分のためにする

富士通フロンテック・ノースアメリカ社長の増田義彦さんの妻、逸子さんは、2004年に夫の転勤を機に渡米。日本ではコピーライターとして働いていた逸子さんだが、渡米以降はずっと専業主婦だ。日本から出たいと思っていた矢先のアメリカ転勤は、逸子さんにとってこの上もない喜びだった。

しかし渡米後2年間ほどは、社長の夫とのぎこちない関係に悩む日々だった。夫は月の半分以上出張し、出張がなくても外出が多いなど多忙を極めていた。当時、3人の子供は10歳、8歳、6歳と手のかかる時期。家のこと、学校のこと、「コミュニケーション」のこと、すべてが逸子さんの肩にのしかかった。正直、社長である夫を家庭で支えるという余裕もなかった。そうした状況が続き、逸子さんはいつしか疲弊。「もうダメだ」と思ったことが多々あったと言っ

「思うことが現実になる。だから、自分の理想の世界を心に描けば、理想の世界が開ける。」
苦悩の中で、この教えを実践することにした。

当時の逸子さんは、うまくいかなかったのは相手に問題があるという思いに支配されていた。しかし本当は、相手に問題があると思っ

「こうなってほしい」と自分の思いを相手に強要しているだけでした」と、
「自分を振り返る逸子さん。自分のエゴと家族への愛情の境界線が明確になった瞬間だった。」
それ以来、「自分がやりたいからやる」という意識に変えた。そして、「自



サンタモニカで、友達とランチした時のスナップ写真。楽しく食事をする義彦さんと逸子さん

分の時間がない」のではなく、「すべては自分の時間」でそれをどんな気分でも過ごすかは自分次第と思うようになった。
「主人の付き合いに同行する時、私も楽しいから付いて行きます。毎日あれだけ大変だった子供の送迎も、子供たちと一緒に過ごせる貴重な私の時間と思うと、まったく違う自分になりました。」

公私共に活きる おしゃべりヒーリング

逸子さんが変わったなら家族が変わった。一番変わったのは会社の顔として働く夫だった。バランスが崩れていた家族に、ハーモニーが生まれた。増田さん夫婦は、あまり過去の話をしない。それよりも、二度と戻らない「今」を大切にしたいからだ。毎週土・日の2時間、2人は必ずビーチを歩き、色んな話をする。夫の仕事の話、逸子さんの日常の話、互いのやりたいことや子供のこと、そして2人の将来…。

「ソファアに座って話すのとはまったく違いますね。自然に囲まれてゆつたりとした気分で、身体を動かしながら話をすれば、互いの頭の中がスッキリまとまります。この習慣が2人の関係を良くしていると思います。主人もこの時間を大切にしてくれていますし、彼の仕事に活かされているのではないのでしょうか。」

逸子さんは、この習慣を「おしゃべりヒーリング」と呼んでいる。これからの時間も、できるだけたくさん笑顔を一緒に歩んでいきたいと語る逸子さん。義彦さんが社長職を遂行できているのも、こうした夫婦の安定した関係があるからこそであろう。

あなたを必要としています。

